

2019. 8. 11. 聖霊降臨節第10主日礼拝式説教

ルカ福音書講解説教

聖書：ルカによる福音書4章14-30節

『憤りの中を通り抜ける主イエス』

「ガリラヤの春」という表現があります。かつて主イエスの伝記を、生涯を描いた人々によって用いられた表現ですが、こういう意味です。主イエスが伝道を開始したころ、イエスの話を聞きたいと思う人たちが少数であっても集まり、主の話の熱心に聞き入り、そこから従う者たちも生まれていき、穏やかで、豊かな宣教の歩みがなされた、その宣教の始めの時期のことをガリラヤの春、と呼ぶのです。

やがて、ガリラヤの春は終わり、多くの人が主イエスのもとに群がるようになり、奇跡や、治癒行為を求める人々も膨れ上がり、同時に、主イエスは敵対者や、批判者に囲まれるようになり、激しいソルトや軋轢が生じ、主は十字架へと向かっていくことを余儀なくされる。ガリラヤの春は過ぎ去った、そのように使われている言葉です。

福音書でも、マタイによる福音書を読んでいると、「ガリラヤの春」というような時期があったのかもしれない、と想像できないこともない。けれども、ルカによる福音書を読むと、そもそも「ガリラヤの春」と呼べるような時期があったのか、疑問視せざるを得なくなります。

先週、今週と二回にわたって聞いているルカ福音書4章14-30節の聖書箇所は、主イエスが宣教を開始された、その最初の時のようすが描かれた聖書箇所です。主イエスは宣教の開始をご自分の故郷ガリラヤ地方で始められました。さらに文字通り育った地、地元ナザレに行き、その地の会堂で聖書を朗読し、説教をされたのでした。その内容については、先週と一緒に聞いたのですが、今朝の箇所22節には主イエスの説教を聞いた人々の反応が記されています。「皆はイエスをほめ、その口から出る恵み深い言葉に驚いて言った。『この人はヨセフの子ではないか。』」短い文章ですが、単純ではない地元民の反応が表現されています。まず、人々はみな、主イエスの説教をほめた、称賛した、というのです。ところがその後、彼らは主イエスの口から出た恵み深い言葉に驚いて「この人はヨセフの子ではないか」といったのです。この言葉自体は否定的なニュアンスですよ。「あんな説教したけど、あいつは要するにヨセフのとこの倅だろ。大工の息子だろう。母親も兄弟もみんな知ってるよ。」これは、立派な説教をしたイエスに対するヨセフの息子なのに、よくまああんな

立派な話をするもんだ、という素朴な驚きを含みつつも、なに偉そうなことを言ってるんだ、という軽蔑めいたものだったのではないか。

このナザレの人々の反応に応答して、主イエスの方から二つのことを言います。一つは、「医者よ、自分自身を治せ」ということわざ。もう一つは、預言者は自分の故郷では歓迎されないものだ、という言葉です。

「この人はヨセフの子ではないか」と言われただけで、なぜ主イエスは自分の方から、ナザレの人を刺激するような言い方をされたのか。医者よ、自分自身を治せ、ということわざは、日本で言う「医者の不養生」、というような意味ではなく、医者は自分自身、家族、地域の人々を治せ、というような意味で言っているのです。続く言葉、カファルナウムではいろいろなことをしたと聞いたが、郷里のここでも、奇跡行為だとか治療行為をしてみろよ、ということです。つまりここはイエスの地元なのだから、他の地域なんぞではなく、ここでこそ、驚くべきわざを示せ、というある種の地元民意識、さらに言えば特権意識。

もう一つの預言者は故郷で歓迎されないというのは、どんなに優れた人であっても、地元に戻れば、どこそこの息子、どこそこの娘、という具合に等身大に引きずりおろされる、ということです。どんなに立派なことをしゃべっても、あの子のおしめを替えたんだぞ、のような思いが人々の中にあり、ヨセフの息子、というフレームの中でしか主イエスを見れない、そういう故郷の人々の姿を指摘しているのです。ナザレの町の人だからこそ、知っているイエスの姿がある、場合によっては、人の知らないイエスも知っているのでしょう。だからこそ聞けなくなっている言葉がある。一方で、ナザレの人々が主イエスのことで戸惑い、躓き、躊躇を覚えた、というのはわからないことではない、と思います。父ヨセフも、母マリアも普通の人であり、当時としても特別な宗教教育を受けたわけでもないイエスが、突然宣教活動を始めたことに異和を覚えたとして、何の不思議もない。「あいつ、ヨセフの息子じゃないか」という一言には、そうした様々な思いがこもっている。

しかし、ここには、もう一つさらに根の深い事柄があります。それは、イエスが神の子である、ということに対する異和感です。イエスはそもそも人間であって、俺たちと同じようにナザレの町で、暮らしてきたヨセフの息子、マリアの息子だ。そのイエスが「主がわたしを遣わされた」、と聖書の言葉に自分を託して、語り始めたとき、驚くのは無理もない。驚くだけでない、憤り始めるのです。

人間が、神の子である、ということに耐えられないのです。そんなことはあり得ない

ことだ、と思うのです。これまでも繰り返し申し上げてきたこと、秘儀中の秘儀、受肉の秘儀です。神の独り子が、生身の人間となり、ある時、ある場所で、生を受け、育てられ、成長した人物が、神によって受肉した神の独り子であるということに、耐えられない。ナザレの人たちは、人としてのイエスの日常に具体的に接してきた人たちです。この人たちはあの一人の人間イエスが、よりによって神の子だ、ということに最も耐えられない人たちとして、ここに今いるのです。しかしそれは言うまでもなく、わたしたちも根本のところ、ぶつかる問題なのです。

主イエスはこのナザレ人の反応を十分ご存知だった。承知していた。23節24節は、故郷という関係だからこそその危うさを語り、故郷の人だからこそ、見えていないものがあることを語っている。そして25節からの主イエスの話は、イスラエルの人々ではなく、異邦人を助けた預言者エリヤとエリシャの故事を短く語っています。

それは今度はユダヤ人であるから、見えていないものがあることを語ろうとしておられるということでしょう。神はユダヤ人を通して、神の言葉を語り、その導きを示してこられた、そして今、神はユダヤ人という壁を越えて、その救いの業を実現されるということ、それが見えなくなっている、ということ語られたのです。

この話はナザレ人を、ユダヤ人を激怒させた。ユダヤ人という壁を越えて救いをもたらされる、という話も内容も人々を憤らせたが、主イエスが自分がその救いを齎すものとして、「主から遣わされた」と語ることに激怒した。「これを聞いた人々は、憤慨し総立ちになり、イエスを殺そうとした、というのです。親の顔まで知っている人間を殺そうとする、これはナザレ人の怒りがどれほどのものだったのかを表しています。「イエスを町の外へ追い出し、町が建っている山の崖まで行き、突き落とそうとした。」

最初にお話した「ガリラヤの春」のようなうららかな季節は、ルカ福音書を読む限り、あまり感じられない。むしろ最初からいわば激突。最初から憤り。それはある意味、必然的だったともいえます。人であって神の子、という神秘は人間の理性では受け止められないし、そもそも人間の理解の中に入らないことだからです。そして、神から遣わされた神の子が、ユダヤ人のみならず、異邦人にもその救いの恵みを、福音による解放を齎す、ということもユダヤ人にとって躓きそのものでした。つまりイエス・キリストの宣教の開始は、人間にとって躓きと、反発とを生み出すものでもあった。

しかしそうであるにもかかわらず神は独り子を人としてこの世界にお遣わしになった。それは人が救われる道がそこにしかない、と判断されたからでしょう。罪人の生を担い、人の姿に降り、人の重荷を負う、罪人である人の罪を担う。十字架にかかった主に対して、救い主なら今すぐそこから降りて自分自身を救え、と言われたとき、十字架から降りることなく、無力なものとして十字架で死んでいった、それが受肉ということです。自分の救いに無力であるわたしたちと同じものとなり、その無力に与えられる神の恵みの復活のいのちを主イエスは示された。

神の独り子が人となる、そこには神の断固たる意志がある。神がどうしてもこの世において成就しなければならない救いの出来事だった。受肉は神の愛の業だった。

ナザレ人やユダヤ人がつまづき、憤った。しかし、人はそのつまづきの中で、憤りの中で、神の恵みの業を知るべく、変えられて行かなくてはならない。つまづきや憤りがただ単に否定されているのではない。人はその中で、神の恵みと出会い、神の信実に触れ、人の思いではなく神の思いを知るよう招かれている。だからキリストは、その憤りの中を、通り抜けていかれる。神の思いの熱烈なことを思い知るべきなのです。

D a t a : 聖霊降臨節第10主日礼拝式説教

讃美 : 前431、後390

新生教会礼拝堂